
100年生きる人 + α

高坂歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100年生きる人 + α

【Nコード】

N1524E

【作者名】

高坂歩

【あらすじ】

ーラプンツェルの生まれ変わりの主人公を謎を解いてゆくーミス
テリーファンタジー・・・？

始まり（前書き）

初めての投稿作品なので、おかしい部分があるかもしれません。それでもいい方はどうぞ。

始まり

- a t f i r s t -

「それで？君はわざわざこんな辺鄙な場所まで来たのか？」

「まあ。うん。」

「君は本当に暇人で阿呆なんだね……。」

「……悪かったな。暇人で阿呆で。」

「少なくとも自覚があるとは……いやはや。」

口火を切った少女とも淑女とも言い難い異様な雰囲気纏った見かけはかなり美貌な少女が色素の薄い長い結び上げられていない髪を揺らして頭を振り、水色に髪を染めた少年と青年の間の少年を、老人の様な古風な喋り方で……軽く貶していた。

「いつも思うけど、ロズ。ロズってさあ、捻くれてるよな。」

「帰りましたえ。クールよ。クレリー、馬車を用意してやれ。」くるつと座っていた椅子の向きを反対にした。

「はい。ご主人様、少々お待ち下さい。」クレリーと呼ばれて現れたそれは主人の命を遂行する為部屋を出ようとした。

クールと呼ばれた少年は慌てて言った。

「冗談だって。折角来てすぐ帰る訳にはいかない！」

ロズは顎に手を当て、ふうむと唸った。

「そうか。それでは……。うむ、ダックワースがあつたな。それを土産に持たせれば文句はあるまい？」

「そうじゃない。おれの依頼を聞いてくれって。」

「うーん。と唸りロズは暫し考えた。」

「では、馬車はいいぞ。クレリー。その依頼とやらをこなすかわりにだな、バレッセンのチェリークラフティを買ってこい。」

「ええつ、あれって高いし…。しかもウイニオールじゃんか…。」

「嫌なら、依頼はこなせんな。どうするかな？」

本気で悩み始めたクールを楽しそうに目を細めてロズは見た。

「解った……。」

若干疲れた感じでクールが渋々承諾した。

「依頼とやらを話してもらおうか。」

新しい玩具を見つけた子供のようにロズは瞳を輝かせた。

I Alice in Wonderland

アフエリーテイル（世界名）のイジエル（国名）の奥深く、シャエヴェールにロズ（本名ロズリイアイル・リレルクト）が住む、リレルクト公爵家があった。

余りにも奥深くに在る為訪ねてくる人も少ない。持ち主、ロズと使用人達が数名住んでいるだけだ。ラプンツェルの生まれ変わりですつと17歳の容姿のままであるロズを恐れ近づかない、と言うのが本音だが。

水色の髪の毛のこざっぱりした少年はクール・カーレンス。中流家庭育ちでイジエルの大都市アメリカオンに住む17歳。

アフエリーテイルに他に雲の国イジエル（ラプンツェル）以外に雪と氷の大国キングダム・マアグニファンスト（雪女）、通称マグスト、花の国ローザン（不思議の国のアリス）、風の国ユニイ（赤ずきん）、草と陽の国ウイニオール（白雪姫）、土と木の国ガルザ（眠りの森の姫）、水の国サセット、（人魚姫）アンノウンの8国が存在する。

童話ようになっていく6つの国には生まれ変わりの女の子が存在する。

「ニアがアリスだった？それは本当なのか？」

「ああ。新聞見てないのか？かなり大きく書かれてたよ。」

「最近は見忘れていた…。そうかニアはアリスだったのか…。」
細長いしかし繊細な装飾を施した煙管キセルをぷかりと吸いながら、ロズはゆったりと豪華で座り心地がよさそうな椅子に腰かけている。

「それで？ニアがアリスということは分かったがどの辺に私の力が必要なのだ？」

「それが……。」

クールの話をもとめると、

ローザアン国で【不思議の国のアリス】（今代のアリスを試し、認める為の儀式）を行う前に、ローザアン国のアイカテリネ女王が変死してしまった。最悪な事に、殺されたらしいとの事だった。

彼女の夫はこれを国民に知らせるわけにはいかないと思い、ニアの父親、グナンス・ダリオン伯爵に相談した。

グナンスはロズの事を思い出し、クールと一緒に城まで来てこの事を解決してほしい。とクールを使って言伝ことづてしてきたのだった。

話を聞き終えるとロズはふーと煙を吐いた。

「あの男は、自分の少ない脳味噌を使おうとは考えんのか？一体何にあの脳味噌を使うのだ？しかし何故君なのだ？理解に苦しむ。」

「さあ？自分で頼むよりいいって考えたんじゃない？」

「まあいいか。クールよ、あいつに会ったら交通費などの手数料を請求しておけ。分かったな？」

「？ うん……。」

「いくぞ。一刻の猶予も無い。時間が経つにつれて人間の記憶も薄れるからな。」煙管を終しまうと椅子から立ち上がり部屋を出た。

素早く行動開始し始めたロズを追ってクールは部屋を後にした。

汽車の窓から景色がどんどん流れていく。二人以外に客はいなかった。

向いの席に座り、持参の可愛い袋を窓際の小さなテーブルに置いて中に入っているココアのスノーボールをかりかりと齧っているロズにクールは話しかけた。

「なあ。」

「なんだ。」相変わらずスノーボールを齧りクールの方を見ずにそう返した。

「ニアはどうしてるのかな。」

「さあな。ふむ、アリスと分かってから会っていないのか。その様子だと依頼はグナンス本人が来た訳では無いようだな。」

クールは驚きの余り、スノーボールを1個貰おうとして可愛いし袋に伸ばしかけた手を止めた。

「なんで分かるんだ!？」まじまじとロズの顔を見た。

「秘密だ。」ロズは煙管を取り出しぷかりと吸おうとしてクールに取り上げられた。

「返したまえ。」ぴつと手を出しそう要求した。

「ここ禁煙。」

ふんつと鼻を鳴らしてロズはそっぽを向いた。…怒っているようだ。

「何で分かったの?」

「……………」

「教えてくれたら返すよ。」

暫し沈黙があつたがロズは話し出した。

「あれはかなりの親バカだろう? 会ったら5秒後に娘自慢をするよな奴だ。あれが来たんなら最近の様子も話していくだろう。そして最近のニアの様子を知っていてもおかしくない。だが君は何も知らなかった。無駄話が多いが話すことはちゃんと話す奴だ。私は無駄が多い奴は嫌いだな。」

満足かね？という様子でクールを見た。

「いつも思っけど凄いな。」素直に褒めた。

「そう思うのは君のその脳味噌は飾りだからではないのか？」褒めているのにロズは皮肉を返してきた。

「酷いよ、その言い方はさあ。」

「では優しい言葉を期待していたのか？」

「別にそういう訳じゃないけどさ……。」口を尖らせてクールは黙ってしまった。

コトンコトンと汽車はリズムカルに揺れる。二人が何も話さないと汽車の中は静かだった。

「ねえ、ロズ。本当に、その、殺されたのかな……。」不安げに訊ねた。

「実物を見てみないと何とも言えんな。……しかし暇だなあ。汽車というものは。何か無いものか……。」ロズはじいっとクールを見つめた。

「な、何だよ……。」ちよつとどぎまぎして僅かに声が裏返った。

「いんや。寝るか。」頭を軽く振り、旅行鞆からふかふかのクッションを取り出した。

「……いつも、それ入れてるの。」

「当たり前だ。ああ、そうだ。残ったスノーボールを食べてもいいぞ。」

「え？ああ、うん。じゃあ貰うよ。」

「くれぐれも着くまでは起こさないでくれたまえよ。」

ロズはそう言うのが早いか、クッションを抱え、すうと寝息を立てて寝てしまった。

クールは向かいの席で可愛い寝息をたて、寝ている少女を眺めた。（本当に童話に出てくるラプンツェルみたいに可愛い……。）

彼女の色素の薄い長い髪が陽に当たり髪が透けて見えた。

長い睫毛も良く整った鼻や小さな唇もロズを際立たせていた。

そのままクールはロズに見入っていた。

また穏やかで静かな時が汽車を支配した。
窓から降り注ぐ太陽の光が優しく二人を見守っていた。

始まり（後書き）

どこで切ってよいのかよく分からないよ……。 orz 続けられるように頑張って書いていきます。

始まり――ⅠⅠ――

「相変わらずここは花だらけだな。」汽車を降りて開口一番に口ズはそう言った。

「花の国だし。しょうがないよ。」二人分の荷物を重そうに持ったクールはロズを慰めた。

「馬車を用意するってグナンスさん言ってたけどなあ。何処だろ……。」

辺りをクールがキョロキョロと見回していると、見るからに高級な箱馬車が近づいてきた。

二人の前に一寸の狂いも無く止まった。

手綱を握っていた初老の男は箱馬車の運転席から降りて二人に恭しくお辞儀をした。

「リレルクト公爵様とカーレンス様でございますね？わたくし、ダリオン伯爵家当主グナンス様に仕える執事のアレクサンドルでございます。以後お見知り置きを。」

「ああ。リレルクトでいいが？」

「失礼にならぬようにと主から受け賜わっております。」

どうぞこちらから。と言ってアレクサンドルは箱馬車の豪華な細工のされた扉を開けた。

ロズは慣れた様子で馬車に乗り込んだ。

クールは慣れない様子だったがなんとか乗り込んだ。

コトコトと馬車は走り出した。

「どうかしたのか、クール。やけにそわそわとしているが？」

「いやあ。なんかこんな豪華な馬車乗ったこと無いから落ち着かなくて。」

「ふむ。これが格差というものだな。」

はあ、とロズは溜息を一つ吐いた。

（時が流れてもこれはまだ無くならない、か。）

ロズは物思いに耽^{ふけ}る為窓の外を眺めた。

クールも馬車の高級さに慣れてきたのか落ち着いて座っていられるようになった。

外の景色がだんだんと変わっていく様を二人は眺めていた。

馬車は花が覆い繁る、一般人侵入禁止という札が時折ある道を進んで行った。

大きな鉄製の門の前で馬車は停まった。

厳^{いか}つい顔の番兵が馬車を手振りで停めた。

「名前と通行証を提示しろ。」無表情な番兵は硬い声でアレクサンドルに言った。

「名前は、アレクサンドル・グラッゼ。グナンス・ダリオン伯爵家一等執事でございます。通行証はこちらに。」

通行証といって差し出されたそれは綺麗な深紅の薔薇のブローチだった。

「よし。それに乗っている奴らは誰だ。」

「ロズリイアイル・リレルクト公爵様とクール・カーレンス様でございます。例の件について解決してくれる人物です。」最後の方は他の者に聞こえぬように小声で番兵に囁いた。

アレクサンドルは馬車の運転席側に付いている小窓を二回ほど叩き、その小窓を開けた。

「御二人とも、何か身分を証明出来るものはお持ちですか？」

ロズはごそごとポケットを探り、金の懷中時計を差し出した。

クールはそのような物は持ち合わせていないのか、首を振っただけだった。

アレクサンドルはロズからそれを受け取ると、番兵に見せた。

「これを。」

番兵はそれを受け取ると、驚きと悔しさを露^{あら}わにした。

「噂のラプンツェルか……」

どうやらこの番兵ロズの事をあまりよく思っていないようだ。

この世界には少くない事だが。

番兵は懐中時計を返すと、鉄製の門を開けた。
鉄が擦れる独特の音がして門が開いていった。

アレクサンドルはロズへ丁寧に懐中時計を返した。

「どうぞお通りください。」

無表情で番兵は言った。

アレクサンドルは苦笑しながら会釈して馬車を走らせた。

大きな城が近づくにつれて、両脇に色とりどりの薔薇が沢山覆い繁るようになってきた。

「凄い薔薇の数だなあ。」外を見ていたクールはくるっと向きを変え、ロズの方を向いて言った。

「そうだな。『不思議の国のアリス』が根付いているから余計だろうな。」面倒臭そうにしながらもロズはちゃんとクールに返答した。

暫くして白亜の巨大な城に到着した。

余りの巨大さに二人は圧倒された。

とにかく大きかった。現代で言うところ、高さは東京タワー（333m）くらいか？と言いたくなるくらいなのだ。（かなり高いことが分かって頂けただろうか？）

アレクサンドルは馬車を停めると、

「申し訳ありませんが、ここから降りてもらわなければならないのですが。」と本当に申し訳なさそうに言った。

ロズはそれを聞き、自ら扉を開け、降りた。クールも釣られて降りた。

「では、これからは私達だけでゆくか。」

「ですが……。」

「大丈夫だ。『私』が来たのだから。」自信たっぷりにロズは言い切った。

アレクサンドルは若干不安そうだったが目の前の相手は只者ではないと悟ったのか、大人しく下がった。

「何かありましたら、名前を呼んでいただければすぐに参りますので。」

それでは。と言い残して馬車を連れて去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1524e/>

100年生きる人 + α

2010年12月22日02時15分発行